

はしがき……………秋山 虔……………一

目次

研究篇

『源氏物語』と儒教思想……………池 浩三……………七

撰関時代における「日本仏教」の構想

——『三宝絵』と『空也誄』を素材にして……………小原 仁……………四三

『源氏物語』作者の思想と信仰

——平安朝天台との比較を中心に……………大場 朗……………七五

平安王朝社会の成女式——加笄から着裳へ……………服 藤 早 苗……………一三

第一御学問第二管絃——音楽面から見た光源氏の印象……………石田百合子……………一五

木幡山から宇治へ——宇治十帖の風土……………藤本勝義……………一九七

六條院の調度——調度品図面集——……………井筒與兵衛……………三七

資料篇

『源氏男女装束抄』管見……………高田信敬……………三五

源氏男女装束抄(宗碩)翻印…………………………二七五

研究篇

『源氏物語』の六条院については、すでに拙稿「光源氏の六条院―そのかくされた構想―」（『中古文学』第四十八号、一九九二）の中で、その四季の町に住む女君の個性やその人生行路は『易経』の乾・坤・巽・艮の卦爻辞を骨格として造型されたということを概説した。本稿では、乾卦の卦爻辞と明石の君の人生との対応関係をいまずこし詳しく考察するとともに、そういう構想の背景や創作の動機、あるいは周辺の問題を、儒教思想の観点から見てみたい。もとより、そのような思想的、文芸学的考察は、一建築学徒の能く成し得るところではなく、多くの先学の成果に依つて管見の及ぶところの概要を述べたに過ぎない。諸兄のご批評を仰ぎたい。

## 一、楽府進講の周辺

『紫式部日記』のいわゆる消息文的部分に、式部が中宮彰子に「文集」の「楽府」二巻を進講したという記事がある。その前段には、一条天皇が「源氏の物語」の作者について、「この人は日本紀をこそよみたまふべけれ。まことに才あるべし」と讚えたとか、少女の頃、父為時が教える漢籍を惟規より先に習得して、「書に心入れたる親」を「口惜しう、男子にて持たらぬこそ幸なかりけれ」と嘆かせたという逸話を記している。「一といふ文字をだに書きわたしはべらず、いとてづつに、あさましくはべり」などと言いながら、こういう話を書くのだから、父の存在とともに自分の「才」あるところを是非とも披瀝しておきたかったのであろう。ともあれ、これらの文章は『源氏物語』とその作者を考える上でやはり見逃せない。

宮の、御前にて、文集のところどころ読ませたまひなどして、さるさまのこと知らしめさまほしげにおぼいたりしかば、いとしのびて、人のさぶらはぬもののひまひまに、をとししの夏ごろより、楽府といふ書二巻をぞ、しどけながら教へたてきこえさせてはべる、隠しはべり。宮もしのびさせたまひしかど、殿もうちもけしきを知らせた